
妖屋奇譚 ~ 帝京騒乱記 ~

ama

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖屋奇譚 ～帝京騒乱記～

【Nコード】

N2875C

【作者名】

ama

【あらすじ】

表向きはただの豆腐屋。しかしそこは妖怪退治を引き受ける「妖屋」だった。江戸の二次世界のある町、「帝京」で起こる妖怪戦鬪物語。

第巻話 W r i t t e n b y 琥珀

「こらっ！なにやっとなるんじゃ。店はどうした、店は」
爺ちゃんの罵声が飛ぶ。

「あいあい、分かったつての！店もどりゃいいんだろ！」
ったくうっさいな。

俺は一緒にいた仲間の手を振って店に戻った。

陰ひかげとうふ店

俺の住んでる家。とうふや。ぼろぼろのくせに活気は未だ衰えな
い、ここらじゃ名の知れた豆腐や。親父は頑固に短気ときたもんだ
からまったくやっつてらんねーよ。

俺はそう思いながらも裏口から店に入って並んでいたお客に声を
かける。

「らっしゃい、どちらの豆腐で？」

「キ又を一丁お願いするわ」

注文があつたものを持つてくる。それをお客の持つてきたなべに
ひよいと入れる。

まな板からするりとすべった豆腐がうまくなべにおさまる。

どんなもんだい！

「ありがとうございやしたあー」

お客は背を向けて帰っていく。

これの繰り返しだ。きつと無愛想にも見えるだろう。けれどそん
くらいで客が減るわけでもないし、そんなに気にすることじゃあな
いだろう。

「竜介ー」

リュウスケ、と店の奥から声がした。

この声からすると銀子だろう。あの大馬鹿野郎、仕事中心だったのに大声で呼びやがって。

と思いつつ、時計を見ると7時。もう客もいなくなったし閉店の時間だ。

そう思い俺は店ののれんを下ろした。

「なんだあ？銀子」

「早く来なさい！竜介」
「うっせー奴だ。」

銀子はこの娘。同じ年で短気、俺にだけ冷たい。という奴。「可愛い」「綺麗」とこの町ていしやう帝京では有名ならしいが俺にはどうも理解できない。

「こらあ！早くしろって言うてんだろあ？」

言葉遣いが男っぽいのも特徴のひとつ。

「来たぜ」

「出たよ、アレ」

「妖怪か!？」

第貳話 W r i t t e n b y アオ

豆腐を売るなんてつまらねえ。

でも金がねえんだよ。自由になれるくらいの金は。

金のため俺は、豆腐を売る。売り続ける！

なんて

そんな莫迦な話があるものか。

もし豆腐を黙々と売るなんて芸当ができれば、俺が一文無しだなんてことにはならないだろう。

綺麗ごとばかりじゃ世の中は渡っていけない。

かといって、闇の中だけで生き続けるのも、なかなか難しい。

だから俺は両立する。

豆腐やの俺の裏で、もう一人の俺は…

「出たよ、アレ」

「妖怪か!？」

陰 竜介。

リュウとかリュウスケとか呼ばれる俺の本業は、何を隠そう『ヨウカイタイジ』。

世の中に昼夜関係なく現れやがる『妖怪』を退治するのが俺の仕事。妖怪が現れたと、この金喰い虫のアバズレ女：銀子から報告された途端、豆腐なんかどうでも良くなる。

今日なんかは閉店してからの報告だったから、俺を豆腐屋に居候させてくれている爺さんも文句は言わない。

が一度、豆腐の入れ物を蹴飛ばして外に出たことがあり、その時の爺さんの制裁と来たら酷かった。思い出しただけで、胆の据わった俺も蒼ざめてしまう。

まあ今は、そんなもの思い出している暇じゃあねえか。

「銀子！ どっちだよ！」

「はあ？ なんでアタシがアンタにそんな面倒くさい説明しなきゃいけないのよ！ アンタのペットに聞けば良いじゃない」

全く無責任だ。誰が俺を妖怪退治に向かわせているというのか？
テメエだ。

それなのに妖怪の居場所も教えねえとは。それが銀子の性格なのは重々承知し始めたけれど酷い。

「ちっ、しゃあねえな。…白銀！」

俺は、『ペット』の名前を声を大にして呼んだ。するとすぐに『はい』という間の抜けた返事がし、俺の隣で小さな銀色の竜巻のようなものが起きる。

そしてその中から出てくるのは、とびつきり鼻と目の利く

「来たつてよ。出陣だ、白銀」

「あいよ」

俺の、相棒。

第参話 W r i t t e n b y 佐倉信輔

長屋の間を駆け抜けていく。

昼過ぎの町は人が多くていけねえ。面倒くさいから途中から長屋の屋根に登ってその上を駆ける。下から窓越しに婆が怒声を飛ばしてきたが、一切無視だ。

ちなみに一言断っておくが、なにも客が来ないから豆腐屋を早仕舞いしているわけじゃあない。

豆腐屋の仕事というのは午前中までに大概を済ませてしまうのだ。まだ丑三つ時から仕込みを始め、早朝から営業開始。昼を過ぎる頃には商品を売り切ってとっとと店じまいしてしまうのだ。

って、豆腐屋のことなんぞどうだっていい。

俺にしてみりゃこっちの方が本業。豆腐屋なんてただの暇つぶしだ。

「どうやらあれだねえ」

白銀しろがねの声に、俺は天空の向こうを仰ぎ見る。

なるほど、確かにいやがる。どうやら今日の獲物は蟲むしらしい。人の顔程もある羽蟲つひが何匹も飛んでやがる。

「あれは死壺蟲しちしだねえ。死人いひしの魂をあさる卑しい連中さ。あの辺で誰か死人がでたんじゃないかい？」

白金は事務的に解説を加える。長生きしてるだけあって妖怪の知識は深い。あの爺ですら一目置いてるほどだ。

「なんでもいい！ ぶっ飛ばしやいいんだろ！？」

「まあ、できるならねえ」

つくづく嫌味な野郎だ、全く。

「一分で片付けてやるよ」

そう言つと右腕に念を込める。

あつという間に右腕は大振りの爪

金剛爪こんごうつめに姿を変える。

これが俺の能力だ。

爺が言うには、俺は生まれつき体内に霊体武器ウエゴというのを宿しているらしい。そいつを解放する事で生身でも奴らと戦えるってわけだ。

金剛爪をふるって目の前の二匹を瞬時に片付ける。 楽勝だぜ。

が、次の瞬間。

「穂月ほおつきビィ〜〜ム!!」

いきなりピンク色の光線 性格には妖気を圧縮した波動だがかっ飛んできた。

俺は慌てて防御したが、ビームをまともに食らって吹っ飛んでしまった。

「手前エ、毎度毎度いい加減にしろ、このクソウサギ!」

叩きつけられ、粉々になった長屋の梁はりを押しつけて、俺は立ち上がった。

その上空では、ピンクの着物を着た切れ目のウサギがニヤニヤしながらこちらを見ている。

「だあってえ、キンちゃんのお邪魔だったんだもぉん」

おどけたような というか、人を小馬鹿にしたような口調でウサギはそう言った。

「こんのヤロ」

「穂月の言う通りだ。妖怪退治は我々政府直属除霊部隊・“玄武げんぶ”の任務だ。非合法なモグリ野郎はそこで黙って見ている」

屋根の上に立つ美麗な青年がそう言い放った。

尊大な口調といい、人を見下す冷徹な目つきといい、相変わらず毎度毎度いけすかねえ野郎だ。

奴の名は高円寺こうえんじ 金成かねなり。

政府の直属で密命を受けて暗躍する隠密部隊・“四神隊しじんたい”の一つで、除霊や妖怪退治を専門にこなす除霊部隊・“玄武”の若き隊長だ。

ちなみに“青龍せいりゅう”は治安部隊、“白虎びやくこ”は暗殺部隊、“朱雀すゐく”は皇族護衛部隊という構成だ。

俺は何か言おうとしたが、金成は完全に無視して反対を向くと、腰の刀を抜き左手を刃先に滑らせる。

たちまち刀は青白い光を帯びて淡く輝きだす。

剣士であり、霊刀使いである奴の愛刀・“霧幻^{むげん}”だ。

第肆話 W r i t t e n b y 蒼音みるく

金成が霊刀・霧幻むげんを振るう。

斬ざん！

羽蟲が一瞬にして塵と化した。

相変わらず、奴には無駄な動きがいつさい無い。

「てゆうーかあ、リュウは感心してる場合じゃないと思うんだけどお
白銀しろがねが俺をシラーっとした目で見ている。

「へえへえ。じゃあ、お前はうるせえクソウサギを黙らしとけ……

それができれば、だが」

俺も負けずにシラーっと言い返すと、白銀の目に 久しぶりに光が
灯った。

蟲が飛ぶ。俺も跳ぶ。爪が光る。羽が散る。

と、金成の刀が降ってくる。俺はそれを避けると、金剛爪こんごうつめを奴に向
けた。

日光が「爪」に反射し、奴の目を射た。

一瞬、金成の目がくらんだのがわかった。隙ありとばかりに「爪」
を振り下ろすと、霧幻がそれをギリギリで食い止める。

ガリツと嫌な音がして、双方の武器が離れた。お互いに睨み合うよ
うな位置取り。相手を伺いながらも、蟲をぶった斬る。ブンブンい
うもんはそれだけで目障りなんだよ。

「一番目障りなのは、もちろんテメエだがな」

鬱憤晴らしに呟くと、地獄耳の奴はすぐさま反応した。

「モグリのお前から『目障り』なんて吐かれるとは、政府の部隊も
落ちぶれたものだな」

「へんっ」

毎度毎度、金成のキザっぷりには反吐へんが出る。

「おい、それは自分で自分を嘲あざわらっていると見ていいのか？タカマル」

高円寺 金成の「高円」の部分を訓読みで“タカマル”。俺は別に文学少年ってわけじゃあないが、時々言葉のアヤで遊ぶクセがあるのだ。まあ、こんなことどうだってい……え？

「んだとおらあっ!？」

次の瞬間、金成が 人を見下したような表情から一変、青筋立てて猛スピードで斬りかかって来た。

(もしま、名前からかわれてムキになったとか!?)

ふいに、前に爺が言っていたことを思い出した。

『よいか、竜介。政府の隠密部隊の奴らはプライドが高い。プライドは鬨いに良くも悪くも影響するのじゃ』

『何が言いたいんだよ、爺ちゃん』

『つまりはな』

爺は偉ぶったようにコホンと咳払いをした。酒が回っていたのだから、顔が少し赤い。

『相手の性格を上手く利用しろ、ということじゃ』

あのとときの爺はちょっと酒が入っていたが、それでも言ったことは当たってた。俺がちよつと名前でからかっただけで奴は感情的になっている。脇も腹もすきすき。チャンスつてもんだ。

「おもしれえな、いつもは冷静な金成くんが」

斬りかかるとき、そう耳打ちしてやった。もちろんこの時はちゃんと名前で呼んであげたぜ。

俺とは反対に、白銀の方はこてんぱんにやられていた。穂月の奴が、ビームのレパトリーを増やしたらしい。

羽蟲はすでに全滅。あたりには黒い塵が残った。

泡吹いた金成を背負った穂月(ウサギのくせして怪力なのだ)は、俺と白銀に恐ろしく笑えるアツカンベーをしたあと、やたらでつか

い独り言を言いながら退散していった。

「キンちゃんも情けないね、あんなバカタレに負けるなんて。まあ、今日のお夕飯はキンちゃんの分も食べれるから、いいとしますか」
夕日をバツクに眩かれても、内容がこんなに腹黒いんじゃないじゃあ……なあ。

「ホント、主人思いなのかそうじゃないのかわからないウサギだねえ」

全身にビームを受けてフラフラの白銀も感想を述べた。お前だってアイツと変わんねえけどな。

「あ、お帰り。へえ、リュウが無傷で帰ってくるなんて、珍しいじゃない」

銀子が軒先に出てきた。冷たい出迎えだけど、俺としては嬉しい、と思っっているのは秘密にしといてくれ。

第五話 W r i t t e n b y 琥珀

「す、すみませ……ん」

店の表の方からまるで「化けもん」みたいな細かい声がする。それはもう本当に化けもんみたいだった。

「あーい」

俺はめんどくさそうに返事をした。実際面倒だったし。

「あの、まだ店開けてない……」

まだ店開けてないんですけどおー。

そう言おうとして俺は口をつぐんだ。そして目をみはる。

そこにいたのは「とびっきりのべっぴんさん！」と人々から称されそうなそれはまた綺麗な人だった。

歳は俺と同じくらいだろうか。

長めの髪を綺麗に結び上げている。

白い肌、栗色の目。

すべてに目を奪われてしまう。

「あの、ここって妖屋あやしやさんですよ」

その女の人、というより女の子といって良さそうな人は聞いてきた。

「あ、豆腐じゃないんですねー。じゃあ、こちらのほうにどうぞ」

俺はそうできるだけ丁寧に言ってその子を案内した。もちろん真正面の玄関なんかじゃなく、もう1つの玄関のほうだ。

店の横に取り付けられた、どちらかという店より自宅に入る用の玄関。

だが、そのドアには「妖屋」と汚い文字で書かれた小さい看板がつるされていた。

まったく、何て雑というか大雑把なんだろう。と思ったが、俺が

書いたことを思い出す。

われながら赤面……。

ま、そんなことは気にせず、俺はドアを開けて案内を続けた。入ってすぐ右にある部屋に入る俺達。そこにはすでにジジイがいた。きつと何かを察したのだろう。

そして丁度銀子も入ってくる所だった。

「ご用件はなんでしょうかね？お嬢さん」

ジジイは「のったりまったり」が嫌いだからか、早速話を切り出した。まだその「お嬢さん」は座ってないってのに。この阿呆が！と思っていたら、何か感じたのだろうか、一瞬こっちを睨まれてしまった。慌てて目を逸らす俺。

「とりあえず座ってください。今お茶お持ちしますねー」

銀子は気を使ってそんな風に接客をしていた。

女の子は「ありがとうございます」とだけ言って座った。

ジジイと俺が机をはさんで女の子と向かい合う形になった。

「実は今、家は妖怪で脅えきっているんです」

「ほほう」

ジジイは相づちを入れる。

「いつも見張られているようで、たまに縛られる感じにもなるんです。祖母はそれで倒れてしまっ……。祖父も今は寝たきり状態なんです。母ももう疲れきっています」

非常に興味深いすなあ。

ジジイは呟くのだった。

第陸話 W r i t t e n b y 佐倉信輔

「まあ、詳しい話は現地で聞かせてもらいましょう。 時にお嬢さん、お代の方なのだ。」

このジジイ、依頼の内容をよく聞きもせずいきなり報酬の話に持っていきやがった。

銀子は銀子で、

「うちも慈善事業でやってるわけじゃないんで
とかのたまっている。」

女の子はうなずくと、携えていた風呂敷包みを取り出してそれを広げた。

中からは金色に輝く小判が一枚、二枚。 すごい、一体何枚あるんだ？

「三十両あります」

俺の心の声が聞こえたかのように、女の子はそういった。
ジジイはうなずいて三十両の小判を懐にしまいこむ。

「では、契約成立じゃ。リュウ、ギン、早速行って来い」
そんなわけで、銀子と二人連れ立ってのご出勤とあいなつたわけである。

現地に向かう途中で近江絹代おひみきぬよと名乗つたその女の子の家は、驚いた事に旅籠はたご（いわゆる宿屋のことだ）だった。それも相当立派な。

これじゃ三十両なんてへでもないわな。 そう感じながら、旅籠の敷居をくぐる。

外身とは裏腹に中は閑散としている。 どうやら、妖怪騒ぎのおかげで客は全くいないようだ。

絹代に案内されて普通は客の入る場所ではない裏間へと通される。こちらもかなり広くて、繁盛振りがよく伺えるような豪華な作り

になっている。

一見質素な作りに見える家の健在も、よくみりゃ全て唐木（大陸産のきわめて高級な建材）だ。

倒れた祖父母のいるという寝所に通される。これまた上等そうな布団に一組の年老いた男女が伏せっている。

「祖父と祖母です」

見りゃあ分かるが、絹代が丁寧に紹介してくれた。

どちらもかなりやられてしまっているようで、生気なく横たわっている。

横から銀子が小声で耳打ちをしてきた。

「どうよ？ 何か感じる？」

「いいや。特に何にも」

。 霊や妖怪の仕業なら、必ずどこかにその気配があるはずなのだが。

「二人の状態を見る限りでは、怪我や病気じゃないわね。霊障か呪いの類とみて間違いないわよ」

。 とはいっても、現状手がかりらしいものは見当たらないしなあ。

「とりあえず、一通り建物の中を見せてくれる？」

銀子がそう言い、俺達は絹代に案内されて建物の中をくまなく見て回る。

裏間から厨房、客室まで一通り 丁寧に建物の中をチェックする。霊障の原因が建物の方にある、何て事例は腐るほどある。例えば建物自体が呪われていたり、取り憑かれていたり。

一通り見てまわり、再び裏間へ回ってきた所で銀子の目が止まった。

その辺りの建材を舐めるようにチェックし、そして絹代の方を向き直って声をかけた。

「ねえ？ ひよっとしてこの旅籠、最近建て替えとか建て増しとかしなかった？」

突然訊かれて絹代は少し戸惑ったようだったが、それでも小さくうなずいた。

「はい。事情があつて三月ほど前から。十日ほど前に普請ふしんが終わつたばかりです」

ちなみに普請とは工事のことだ。

なるほど、言われて見れば裏間の建材は他の場所より新しい。

「あの、それが何か？」

絹代が怪訝そうな顔で尋ねてきた。

すかさず銀子が説明を入れていく。前方に突き出した勝手場を指して言った。

「あの部分ね。鬼門きもんつていって、妖怪の通り道になる場所なのよ。

鬼門を塞ぐ形で建物を立ててしまうと、その建物の中に妖怪の通り道ができちゃうってわけ」

つまり、鬼門の場所に勝手場を立ててしまったがゆえに、霊や妖怪どもが裏間の中を通り抜けるようになってしまったわけだ。

当然毎夜のように家の中を百鬼夜行が続けば、その住人は妖氣あに中あてられて体調を崩す。

だが変だ。自前で普請したのならともかく、専門の鳶とび（いわゆる大工のこと）に依頼したのならその辺りはきちんと抑えて設計をすればずだ。施主がいくら無理を通そうとしても、鬼門だけはどこの鳶とびだつて譲る事はしないはずだ。

銀子も普請に思つたらしく、その事を尋ねた。

絹代は「詳しい事は存じませんが」と前置きして語ってくれた。

「実は最近客の入りが落ち込んでいて。それで父様ちちひさまがある高名な易師の先生に診ていただいたんです。そうしたら家相がよくないと言われて、それで普請することになつたんです」

俺は銀子と顔を見合わせた。

「おい、ひよつとして普請を請け負つた鳶とびつてのはその易師の紹介じゃあねえだろうな？」

絹代は果たして、「そうですね」「と言ってうなずいた。俺達は思わず大きなため息をついてしまった。

「見事にやられたわね」

銀子は首を振りながら呟いた。

絹代は何がなんだか分からないような顔をしていたので、俺は努めて優しく、丁寧に説明してやった。

「あんたの親父さんはさ、その易師先生にまんまと喰わせられたのさ」

つまりこういうことだ。易師と鳶は互いに組んでいたわけだ。金を溜め込んでいそうな商家に目をつけ、易師が家相等に難癖をつけて普請を勧める。家主が落ちたらグルになっている鳶を紹介して普請を請け負わせる。それで易師は見料を、鳶は普請代を頂く。家主は普請の必要のないような家屋を普請させられ、見料と普請料を払わされてしまうわけだ。

と、それだけならまだかわいい方で、悪質な連中になるとわざと手抜き普請を行って、二度三度普請代をせしめようとする。今回の場合さらに悪質で、おそらくはわざと鬼門の位置に勝手場を建てておいたのだろう。異変が起きて再び家主が易師の元に駆け込んできたら、その部分を指摘してまた高い見料を巻き上げる。そして再び普請させて、鳶に普請させて普請代を吸い上げる、という魂胆だろう。

説明を聞くうちに絹代の顔面が蒼白になっていくのがはっきりと分かった。

「で、この家相を見た易師ってのはどこのどいつなの？」

と、銀子が尋ねた。

絹代はよろけそうになりながらも気丈に踏ん張り、その名前を告げた。

それを訊いて、俺達はまたも顔を見合わせたため息をついてしまった。

絹代の親父さんが見を依頼した易師の名は細乃木万数子^{ほそのぎ ばんすうし}。最

近この帝京で一躍有名になった女性易師だ。

異国の易術である占星術とやらを使い、易の他に霊媒・除霊などなんでも御座れと謳ってすっかり帝京で地位を獲得している。だが、俺達の業界ではそれとは別な意味で有名な女だ。金のためならなんでもする女、そう言われている。事実、俺達の業界ではかなり危ない噂も飛び交っている。例えば、自分を信用しない村人達に怒って、近くの山にあった封印石の封印を解き、その村を全滅させたとか。

これはもうその女と鳶の所業に決まりといってもいいだろう。

第漆話 W r i t t e n b y 琥珀

「あ……わ、私たちはどうしたらいいんでしょうか？」

絹代が蒼白な顔のままに訊いてきた。

「とりあえず俺等の中に入ります。絹代さんは危ないので外で待っててください」

「ちょっとリュウ、あんた人によって態度変えるんじゃないわよ」
う、ぐ。

ま、そこらへんは見えて見ぬふりというか聞いて聞かぬふりというか。とにかく触れるなよ。

と考えながらも返事はせず、かわりに「いくぞ」とだけ声をかけておれたちは中へと足を進めた。

ガラガラ。

引き戸をあけるとそこは外装にもましてたいそうな場所だった。まるで俺等なんか「バチガイ」のような。

「銀子、なんか入ってから感じがちがわねえか？」

「ん、そうね。なんか気配感じるわ」

おっし、こんなときはアイツの出番だ。火には火を、妖怪には妖怪（？）ってな。

「白銀、出て来い」

俺の横でちっさい竜巻が起きる。

「ふにああう」

それは声と称していいものかも分からない音が飛び出してきた。

そして竜巻は消え、中から白いものが出てきた。

「白銀しろがねちゃん登場っ」

これで相棒はOK。

俺はその白銀が肩に飛び乗るのを待ってから聞いた。

「おい、なんか気配感じるか？」

「んー、もう結構するよ。そうとう性質タチの悪そうな奴。あっちだよ
やっぱりな。

俺は白銀の「あっち」の方向を見る。そこは客が泊まる部屋ではなく、厨房の方だった。

「ホントか？」

「……うそ。でもおなかすいたんだよ！」

しゃあねえな。なんて思いながらも自分の腹の調子もあまり良くない。つつか空っぽって言うってもおかしくない状態になっていることに気付く。

それを察したのか、となりにいた銀子がシラーっとした目でこつちを睨んでくる。

だが、わずか3秒後には恥ずかしそうにうつむいてしまった。なんだなんだと俺が困惑の眼差しを向けると、

「あたしも、おなかが減ったわ。朝から何も食べてないのよ」

くくく……、俺がこのとき心配だったのは、腹がよじれすぎてちぎれてしまわなかったことだな。それくらい、それくらい、それくらいわはあ！笑えるんだよ！

「お前ら誰かあ知らねえが、腹が減っては戦ができぬ。ってことで、何かつくってやるよ。この二枚目ニゴメ徳さんがな！」

突然厨房から肩幅、だけでなく全体てきにごっしりと筋肉のついたからだのおじさんが出てきた。その白い衣服から見て厨房で働いてる板前さん、みたいな感じだろう。

そしてそれに最初に反応したのは白銀だった。

「よっ、徳さん日本ー！」

「お、ありがとよ！その変な生き物さん」

『変な生き物』である白銀は真ん丸い目をさらに大きく見開いて、その徳さんをじーっと見つめる。

「徳さん、かつくいっ！」

こ、こけるぞ。なんか変な気配でもしたのかと心配した俺がバカ

だった。おだてて飯の量を増やすって作戦かもしれないが、それもさらっと受け流す徳さん。

「なに、あたりめえよう」

なんだかついていけない世界に入っている2人を俺と銀子はただ見つめるばかりだった。

時折顔を見合わせながら。

そんなことで、俺達はうまい朝飯を食ったわけだ。

そして腹がいっぱいになったところに白銀がつぶやいた。

「龍、何か変。さつきよりも妖怪のにおいが強烈だよ」

「んだと！？それ本気か」

白銀は今までのおどけた様子が嘘だったように目をきりりとさせ辺りを見回す。

すると、一点でその目が留まった。

「あっちの奥だ！」

「そっちは風呂があるんで」

徳さんが俺達を見ていった。

「ありがとよ！徳さん。じゃな」

一刻も早く、一般の奴に被害が出ないうちにソイツを仕留めようと思う気持ちが焦り始めた。

銀子も同じ様子らしく、どこか落ち着いていない

「おっし、行くぞー！」

俺達は走り出した。

第捌話 W r i t t e n b y アオ

風呂場は、なんだか汗臭いような、そして腐ったような臭いがした。白銀が「うえ、臭っさあ」と眉（の、あたり）を潜めた。正直すぎるぞ、白銀。

それにしても。

これほどの臭いなら厨房にいたときから俺たちにだって臭っていても不思議じゃない。でも、俺にも銀子にも、二枚目徳さんにも、分からなかった。

だとすりゃあ、此処にいる可能性はグンと高まるわけだ。

「リュウ。…あれ」

銀子が、鼻を摘みながら、ある一点を指差した。

周りが雨雲のように黒くて分厚い。そしてその中央に、なんというのだろう。一見菊の花のような形だが、色はどす暗い緑色。そして毛が生えた、気持ちの悪い妖が居た。

「…見つけた。行くぞ、白銀!!」

「うえーい」

白銀の、気乗りしませんかな、という調子の声なんかよそに右腕に力を込め、金剛爪に変える。

案外わらわらと居て、奴らは風呂場の床をますます滑らせていた。

「うわっ、なんだよこれ！」

思わず足を取られ、カビの中に引きずり込まれそうになる。

「リュウ!!」

白銀は良いよな、飛べるんだから。滑る床なぞ気にせずビームなんか出しやがり、妖にダメージを与えている。

「リュウ！ 後ろ！ …前！ 横にも!!」

銀子の甲高い声。

でも俺も、このまま倒れこむほどヤワな男じゃねえ。なめんなよ。

咄嗟に金剛爪を背中後ろに回し、思い切り床を押しした。

いつも豆腐を運んだりと力仕事をしているせいもあり、そしてこの金剛爪の元々のパワーもあり、わりと簡単に俺の体は宙に浮いた。そのまま、二体の妖に爪を付き立てる。そして床に着地。心臓が高鳴ってきた。

「銀子、帰ったら足洗う石鹸貸せよ!？」

「ふん。…生きて帰ればね」

足元が気持ち悪いまま死んでたまるかよ。

第玖話 W r i t t e n b y 佐倉信輔

妖どもはこちらの存在に気づいたのか、一斉に紫色の触手の様な物を伸ばしてきた。

四方八方から触手が文字通り海月のそののように無数に襲いかかってくる。が、その程度攻撃の範ちゆうにも入らない。

金剛爪に念をこめると、爪はあつという間に鞭状に変化する。念の込め方でどんな風にも形を変えられるのが武器ウエポンの便利なところだ（使いこなすまで相当な時間を要したが）。

鞭を旗球投げ（読者の世界でいうところのハンマー投げに相当する競技だ）の要領で、足元を視点到三百六十度回転しながら振り回す。触手はあつという間に消滅して行く。

さらに念をこめて金剛爪を銃型に変形し、生き残りの妖に向けて掃射してやる。ものの数分で妖どもは不気味な色の残骸へと姿を変えたのであった。

「やれやれ 案外簡単に片付いたな」

金剛爪を収納しながら呟く。

「銀子、風穴ふうけつよこせ」

風穴というのは細い柄の先に掃除機の吸い込み口のような物がくつついたアイテムで、妖の残骸やらなんやら、もろもろを手っ取り早く片付ける為の器具である。吸い込み口のなかは異空間になっていて吸い込んだものを異次元へ飛ばしてしまうらしい（詳しい事はよくわからんが）。妖の残骸は放っておくと再生したり他の妖や霊の養分になったりするので、迅速に始末しなきゃならんらしい。

「竜介、後ろ！」

白銀の甲高い声が響く。

振り向いて俺は思わず後ずさりしそうになった。

不気味な色に変貌した肉塊がより集まって一つに固まっていく。

そして一体の巨大な植物に姿を変えていく。花卉が幾重にもかさな

り、胴体には痛そうな棘がびっしりと突き出してその周りを根元から伸びた葉が覆う。　菊が薔薇に変わったってか？

化け物薔薇は花卉をゆつくりともたげると、中央からいきなり妖気の弾をぶつ放してきた。俺は素早くバックステップして弾をかわす。地面に着弾した弾ははじけて紫煙を噴き出した。

「気をつけな！　そいつは猛毒だよ！」

後ろから白銀が怒鳴る。言われなくてもこいつが半端じゃなくやばそうだって事はとうにわかってらい！

俺は銀子から受け取った風穴で紫煙を一気に吸い込んだ。そして風穴を腰に差すと、再び金剛爪を出現させる。

あのサイズをぶつた切るには並のパワーじゃ足りない。ありつたけの念を金剛爪に注ぎこむ。金剛爪は身の丈の三倍近くにまで膨れ上がった。

化け物薔薇が再び妖気弾を放ってくる。俺は金剛爪を振りかぶると、思いつきりそれを袈裟に振り下ろした。

巨大な爪は妖気弾ごと化け物薔薇を裁断する。化け物薔薇はあっという間に三枚に下ろされた。

もたもたしているとまら再生されちまう。素早く金剛爪をしまつて風穴を構える。そして、一気に三枚下ろしになった化け物薔薇を吸い込んでいく。化け物薔薇はけたたましい断末魔と共にいつぺんのカスも残さず吸い込まれたのだった。

「やれやれ、何とか片付いたな　。あとは鬼門の“封じ”だけか」

「どうやら、そうもいかないみたいだよ」

横から白銀が言った。

「どういうこった」

「おかしいと思わないかい？」

「何が？　そりゃちつと再生が早すぎる気がするが　」

「ちよつとじゃないよ、全く。いくら植物系たってあんな単時間で再生した上に変化なんてできるもんじゃないよ」

なんだかおかしな塩梅になって来た。

「つまりどういうことだ」

「こいつは本命じゃないってことさね。別の誰かが操ってたんだろ
うさ」

おいおい、ややこしい事になってないか、それ。

「リュウ、これ！」

風呂場を確認していた銀子が紙片のような物を持って戻ってきた。

「何だこりゃ？」

「ヨリシロ寄代。って、お祖父ちゃんから教わったでしょうが！」

俺は記憶を掘り起こす。寄代、寄代、たしか呪術だとか呪詛
だかに使う呪具だったか。

「ビンゴだね。寄代があれば再生が格段に早くなる。その上妖の
コントロールもしやすくなる。間違いなく人為的に送り込まれたもの
だね、あいつは」

と、白銀は言った。

妖騒ぎの背後に渦巻く陰謀。しかし、今の俺達にはそんな事
は知るよしもなかったのだ。

第拾話 W r i t e e n b y 蒼音みるく

妖の片付いた風呂場を出て、俺たちは一旦作戦会議といくことにした。人為的に、それも悪質かつ操妖技術の高い奴から送りこまれた相手なら、ただがむしゃらに戦うだけじゃ、本当の『妖怪退治』にはなんねえからな。

銀子は、話し合うだけなら風呂場の脱衣所でいいじゃないかと言い出したが、絹代だつてさつきまで妖怪がのさばつてた隣には腰掛けたかなかるう。結局、俺たちは旅籠はたしの離れにある、絹代の座敷へと移動した。

「わあっ」

座敷に入るやいなや、銀子が歓声をあげた。

「きれい……」

十畳ほどのその座敷は、なるほど、確かに銀子くらいの娘なら羨ましがるといふような雰囲気があつた。

床の間には百合の花が生けており、座敷全体がふわりとした香りに包まれている。箆たんすも鏡台も、桜や梅などの絵柄が彫られている。

よく見ると、襖ふすまにも梅の模様が柔らかに描かれていた。何より、別の襖（俺たちが入った襖の右のもの）の上の欄間らんまに施された、牡丹の透かし彫りが美しくて目をひいた。

「すげえな」

最近の趣向などサツパリな俺でもわかるくらい、綺麗な座敷である。しかし、俺と銀子が感心している横で、白銀しろがねはひとり眉（だから眉のあたりだつてば！）をひそめていた。

「リュウ、ここは危ないよ」

眉ばかりではなく声も潜めている。

「ハア？どこがどう危ねえんだ」

俺もつられて声も潜めた。

「まず、一度廊下へ出たい」

「どうしたのよ、白銀」

銀子もただならぬ様子に気づいたようだ。

「いいから！」

白銀の気に押され、俺、銀子、絹代は白銀に共にワラワラと廊下へ追いやられた。

「もう、なんなのさっ？」

もう一度銀子が白銀へ詰め寄ると、白銀は今までの表情　怒っているような表情から、心底驚いた顔へとうつった。

「なんなのよ、って……リュウも銀子も気づかないのかい？」

そんなこと訊かれても、二人そろって首をかしげるくらいしかできない。

その様子を見て、やっと説明してくれる気になったらしい。白銀は辺り（というか廊下周辺）をキョロキョロと伺いながら、神妙な声でこう言った。

「この部屋には蟲むしが憑よいてるぜ」

「蟲むしい？」

第一声を発したのは銀子だった。

「ちよっ、あん、蟲むしって……あたしにはそんなニオイ感じなかったわよ？」

「それは俺もだ」

普通、妖怪退治を生業なりわいとしている奴らは嗅覚（というか、妖の魔気を感じる力）が鋭い。蟲がそのへんに居たってわかるはず……なのに。

「妖の気配なんか、さつきから全然感じねーぞ？」

「でも、いたんだよ。百合の花瓶があつたら？その後ろの掛け軸に、な」

白銀の説明によると、その蟲は人為的に送り込まれるもので、ある

一定の魔気を感じると送り主にその情報を知らせる、というタイプの奴だそうだ。

「ここで、不思議なことが二つあるんだね。」

一つは、なぜ蟲の気配にリュウも銀子も気づかなかったか、ということ。

そして、誰が 何の為にその蟲を送り込んだかってことさ。」

白銀はここまで述べると、誰かわかるかい？とでも言うように俺らの顔を見回した。

しばらくして、銀子がポツリと呟いた。

「さっきの妖あやかしのせいじゃないかな？」

「あ、妖！？」

さっきの妖って……あの気色悪い薔薇の化けもんのことか？

「あたしの勘なんだけど、あの妖、変な紫色の毒気を出していたじゃない？あれを吸ったせいかな……」って。よくわかんないけどさ。」

「うん、多分それで正解だと思うよ。」

白銀がコックリコックリ頷いた。 ちょっと待て。それならどう

して白銀おまえは毒気にやられなかったんだよ？

「リュウちゃん、忘れないでほしいねえ。あたしはね、ちよっぴり妖怪退治をかじっているだけの人間とは根っから違うのさ。」

鼻につく言い方だが、納得してやらあ。

「そして蟲 名称不明だから仮に“魔気感知蟲”とでもしとくかい のことだが……」

「そこはやっぱり、この件の元凶・細乃木万数子ほそのきばんすうしとその一味の仕業じゃねえのかい？」

俺がすかさず言った。これくらいなら誰にでもわかるさ。

「じゃあ訊くが、なぜこんな場所に、魔気感知蟲なんぞ置くんだい？風呂場の妖を見張るためかい？そんなら、なんで風呂場にもっと近い場所にしないんだろうねえ？」

白銀の嫌味な目線を送ってくる。そんなの俺に訊かれても困るさ。

「あ……もしかして」

再び銀子が何か閃いたような声をあげた。

「魔気を感じする目的は、妖を見張る為じゃなくて……妖怪退治の奴ら　つまりあたしたちね　が来るのを察知する為じゃないの？」

「？」
「つまりね。蟲を仕掛けた奴らは、あたしたちみたいな妖屋あやかしゃが化物を退治したのをいち早くわかりたいわけ。だから、あたしたちから出てる魔気を感じ取る仕組みを置いた、ってことよ」

仕事上　妖怪どもと交流が深い妖屋は長年戦っていると、身体に少量の魔気がまとい始める。

それに加え、戦闘に使う武器ウエポンもある種の魔気で成しているから、自然と身体に染みついてくるらしい。なるほど。

「でも……俺たちが化け物を退治して、そんなに不都合なことがあるのか？これくらいの呪術、アイツらなら他のところでもやってそうだし……一つや二つ見破られたって不思議じゃないだろ？」

「リュウちゃん、よく考えてみよ。あたしたち、この事件はただの悪質普請だと考えてた。でも実際は、風呂場あやかしに妖をはこびらせてもいたんだ。だけど妖を操って民家に潜り込ませるなんて容易なことじゃないよ。この事件には、奴らがもつと深いことを企んでいるに違いないんだな」

白銀が俺を真剣な眼差しで見ている。

「えっ……うっ……じゃあ私は……これからどうしたら……っ」
今まで不安そうにやりとりを見守っていた絹代が、半泣きしている。「しょうがないよ。企みを暴いて、阻止して、やっつけるしかないさあ……」

絹代を元気づけようと、銀子が明るい声で言った。

「はたして、今回の事件は根っこが深いらしいねえ」
白銀の白いため息をつく。

今回ばかりは、一筋縄じゃいかないようだな。

俺は、絹代の部屋に生けてあった百合の花を思い出していた。

第拾巻話 W r i t t e n b y 琥珀

さあて、掛け軸か。

「どうすんの、リュウ」

「いや、見るつきゃないんじゃない？掛け軸」

「白銀しろぎん、お前が先導してくれないか？俺達じゃあ、あの気配は感じられない」

「おっけー！くれぐれも無茶はしない。リュウ達がいなくなったら、元も子もないからね」

白銀は、本当に心配してるのかどうかは別として、そう言った。

そして俺を見て、銀子を見て、前を向いた。

「行くよ」

俺達は一步踏み出した。

蟲が居ると聞いたからか、否かは分からないが、空気が重たく感じました。

普通だと思っていたこの部屋が、どんよりと薄暗く感じた。

これは、普通の一般人だって感じる事だろう。

そう、例え俺達でなくとも。

澀んだ空気は生温い感触を全身に伝わせる。
冷や汗のようなものが頬を伝って滴っていく。
不気味。それがこの事件やまの率直な感じだ。

この建物自体の不自然さといい、風呂場で襲ってきた例の妖といい、この部屋から感じる空気といい、何から何まで何かがおかしい。今までの仕事でも何度だって妖と渡り合ってきたし、修羅場もくぐってきた。

だけどそれとは何かが違う。何かがおかしい。

それを口で説明しろといわれてもうまく説明などできない。こういうのは直感的、感覚的な物で具体的に洗わせるような代物ではないからだ。

それでも後戻りする事は出来ない。進むしかない。

この仕事、この世界に踏み込んだからにはそれは許されないこと。戻ろうとしたり、逃げようとすればそこにつけこまれ魂を侵される。それがこの“仕事”だから。

だから俺は進む。

たとえその先に闇が、地獄が待っていたとしても、生きるために俺は進む。

進むしかない。

第拾弐話 W r i t t e n b y 佐倉信輔

白銀を先頭にゆっくりと掛け軸に近づぐ。

掛け軸は何の変哲もない山水画だった。ここから目線だけで観察する分には、掛け軸からは何も感じなかった。

「どうだ？」

「かすかに残り香があるだけだ。どうやらもう逃げちまったよ
うだねえ」

。そう言つて白銀は静かに首を振る。どうやら逃げられたらしい

。俺と銀子はお互いうなずいた。そしてそろそろと近づき、慎重にその掛け軸を外して床に置いた。

掛け軸の本紙には薄めの墨が踊っている。細く先の尖った岩肌の山から一筋の滝らしい墨の筋が流され、余白には鳥（おそらくは鳶）
だろうか）らしい墨影が描かれている。

さらに視線を落としていくうちに、視線が一点で止まった。本紙の左下の隅に申し訳程度に書かれている小さな崩し文字と赤い印章。
。この掛け軸を描いたのであるう人間の銘と印だ。

「別段怪しいところはなさそうねえ。それにしても下っ手くそ

な絵！ 一体誰が描いたのかしら」

「本田魯山」

俺は銘を指差していった。

「ここに銘があんだろが」

「それって描いた人の名前なワケ？ 絵の一部じゃなくて」
これだよ。

この女、” こういうこと” には異様に疎いんだこれが。

あん？ 何で俺が詳しいかって？ そんなもん、仕事上の常識としてジジイにみっちり仕込まれたに決まってる。そうでなきや俺だって芸術だのには興味がない。

「うわあ、下手つぴな字つ。もう少し丁寧に書きなさいよね」

俺はたまりかねて突っ込もうとしたが、いつの間にか傍によってきていた絹代ぬいしまが先に言葉を発した。

「それ、雪床流ゆいしまの行書です」

雪床流は書の流派の中でもわりとメジャーな部類に入る流派のひとつだ。良家の人間ならそういつたたしなみは必須だから流石に絹代は詳しい。

一方銀子の方は、「これがねえ」と訝しげにその文字を見つめている。まったくこいつは……。

「で、その本田なんたらつて、有名なの？」

おいおい。

ここまでくるとある意味誉めてやりたくなるぜ、全く。

しかし、絹代の方は銀子に向かって「知らんのかい！」と突っ込むでもなく、丁寧に本田魯山について説明を始めた。全く出来たお嬢さんだよ。

「本田魯山は書画・陶芸等様々な分野で多数の傑作を排出しており、不世出とまで言われる天才芸術家です。その筆致・造詣は何者も及び者無しといわれ、その作品には全て破格の値段がつけられるのです。このお軸も父が大枚はたいて買い求めてきた物なんです」

「へーえ」

と、銀子。まだ半信半疑らしい。

とにかく、掛け軸の価値は今はどうでもいい。問題は中身だ。

「何か感じるか？」

一応白銀に訊いてみたが、あいまいな返事しか返ってこない。

「ダメだね。ほとんど何も残ってないよ」

「あれ？」

その時銀子のすつとんきょうな声が聞こえた。

腰が砕けそうになりながら踏みとどまり、ツッコミを入れる。

「何だよ」

「なんか変。手触りが」

ってこいつ、素手で触ったのかよ！

「馬鹿、素手で触ってんじゃねえよ！」

ジジイがいたらぶっ飛ばされるぞ！

触ったのが俺だったらの話だが。

「だってさ、ここ妙に膨らんでる気がするんだもん」

と、掛け軸のちょうど真ん中あたりを指して銀子は言った。

言われてようやく観察してみると、確かにそこだけわずかに他の場所より厚い。

おそらくは中に何かが隠されている。しかし、馬鹿高い掛け軸を裂地から無理矢理引つpegすわけにもいかないので別の方法を使う。

「透視眼くれたま出せ」

銀子はうなずいて、道具入れから真鍮で出来た円筒系の筒を取り出した。筒には呪しゅが彫り込んであって両端と真ん中には金張りの飾り輪が巻きつけてある。片方には朱色の紐が垂れ下がっていて、先端は丸く膨らんだ房状になっている。

これが仕事屋道具の一つ、透視眼だ。念を込めた筒を通して見たものを透けさせ、内側や向こう側に隠れている物を探る事が出来るのだ。

透視眼を通して問題の部分を観察してみる。

「何かあった？」

俺は無言で透視眼の覗き口の方から垂れ下がっている紐の先の房を握りこんだ。

カシャッと音がした後、筒の一部がベロンと剥がれて床に落ちた。便利な事に透視眼には撮影機能がついている。房の中に隠れたスイッチを押すと筒の外幕に透視画像が転写されるのだ。ちなみに剥がれた外膜はすぐに再生する。

剥がれ落ちた外幕にすぐに画像が浮かび上がってくる。掛け軸の中央、先ほど銀子が指した場所付近に不気味な形をした薄い物体が浮かび上がっている。薄い何かには紋様のような文字が刻まれている。

るようにみえた。

「何これ？」

「形はえらく特徴的だが、こいつは人形ひとがただね。呪術や呪いなんかに使う媒体さね。書いてあるのは梵字ぼんじだが、どうやらこいつはこの人形が見た映像を術者に送信するための呪みみたいだね」

つまり、これを仕掛けた誰かはこいつを使ってこの家を監視してたって事か。

「じゃあ、その本田つてのがこれを仕掛けたってこと？」

「アンタ、本当に何にも知らないんだねえ。掛け軸つてのは、絵師の書いた絵を専門の仕立て師が仕立てて完成するんだよ」

「んじゃ、その仕立てたヤツ」

「でも、本田魯山は装具も全て自分でなさるらしいですよ。完全に完成するまでは絶対に他人には触らせないと聞いた事がありますが」

「じゃ、やつぱり本田だ」

ええい、やかましい！

とにかく絹代の話が本当の事なら一番怪しいのは本田魯山という事になるし、違うなら軸を仕立てた仕立て師だ。この場所に人形を仕込むには、作品を裂地に張り合わせる“裏打ち”の工程の時しかチャンスはないのだから。

「ジジイに訊いてみるか」

この手の情報はジジイの方が、それも限りなく詳しい。

俺は電脳神器（いわゆるケータイのような物だ）を取り出してジジイに連絡を取った。

「本田魯山か。確かに奴は作りから仕立てまで一人でこなしちまうって話だな。だが、ヤツが絡んでくるとなると少々ややこしくなるぞ」

俺が本田魯山の事を告げると、ジジイは唐突にそう言った。

「ややこしく、ってどういうこったよ？」

「そうか、お前にやそこまで教えとらんかったな。本田魯山、本名は永篠定綱ながしのさだつなよし燃科丞。二十万石を有する永篠藩の嫡子であり

ながらその地位を捨て、職人の道に進んだ男じゃ。しかしその実、跡目を譲った弟の定頼さだよりを影で操って藩の実権を握っているとも言われておる』

それって下手すりゃ二十万石の国を相手に立ち回らなきゃならんってことかよ。。

どこまでややこしくなるんだこの仕事。。
不意に頭痛がした気がした。勘弁してくれよ、もう。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2875c/>

妖屋奇譚 ～ 帝京騒乱記～

2010年12月8日02時20分発行